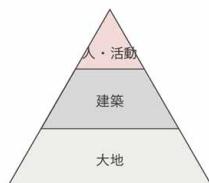
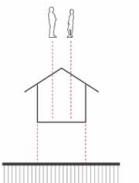


# 地を這う複層連結体

都市における大地 - 建築 - 人の関係性の再考

## 01 CONCEPT | 設計背景

大地 - 建築 - 人の関係



ある固有の大地の上に建築が建ち、その中で人の活動が行われる。

建築行為の基盤とも言えるこの三角形は町の固有を作り出してきた。

大地 - 建築 - 人の関係という建築の初步かつ根源的なテーマを突き詰めることで、この関係性が差離しつつある現代都市において、大地の新たな役割・必要性を見出せないかと考えた。

乖離しつつある関係性



均質な建築および空間



規格化された人々の場所 -- >

建物 -- >

どの場所にも建つ同じ建築 -- >

大地 -- >

固有を持つ都市の基盤

しかし近年において、地形を大きくなし造成し、その上にどこにでも建つような建築がポンと置くように配置されている。その建築の中の空間さえも広さや天井高、照度や開口率など規格化され、均質空間が都市に展開していった。

大地と建築との関係は乖離し、三角形の図式は破壊された。

## 02 SITE | 敷地情報

荒木町という町



スリパチ地形

かつては靖国通りまで続く谷であったが、美濃国高須瀬主松平撰津守の上屋敷の庭園を築く際に谷の一部をせき止めて池を作った。それ故四方が斜面という非常に稀なスリパチ地形が出来上がることとなった。

江戸期



上屋敷の庭園

明治期



花街

現代



中低層住宅街（スリパチ周辺）

かつて荒木町は美濃国高須瀬主松平撰津守の上屋敷の庭園だった。生い茂る木々と巨大な池と高低差4mの池があり、地形を最大限に生かした庭園であったと言える。

明治6年に東京市によって払い下げられた庭園は都内でも有数の景勝地として人気を集め、多くの観光客が訪れた。

それに伴い観光客相手の料亭を出店したことから徐々に柳ヶ淵が形成されていった。

荒木町の芸者は津の守護者と呼ばれる気品が高く新横や赤坂とはまた違った雰囲気を醸し出していた。

花街として栄えていた荒木町が、戦後政府の取り締まりによって次々と料亭が閉店を余儀なくされた。

しかし大人の町の活気はさびれることなく個人経営のバーや喫茶・スナック・小料理屋などが新たに軒を連ねて現在の飲屋街を形成していった。

古くから続いた料亭でもリノベーションを繰り返して店の形だけは存続したり、維々代がいなくて店の名前をそのまままで知り合いで譲ったり、新規の店でも盆踊りや太鼓の会などのイベントで地域と関わろうとするなど町に愛のある更新の仕方をしている。

多彩な周辺環境



建物の用途で色分けをしてみる。

スリパチの斜面からそこにかけては戸建住宅や飲み屋、中規模マンションが展開しており、スリパチの淵の部分、大通りに面している部分はオフィスビルや雑居ビルなどの高層建築が展開している。

ガワとアンという日本の都市構造をそのまま実現したような町ではあるが飲食街や弁財天に残る池の存在がガワやガワの外にいる人々さえもアーバンの中にいること。

しかしそのことにより住宅街の平穏が崩れ去るということではなく、スリパチ地形特有の爽やかさが聞こえてくるか分からぬ不思議な距離感により、住民たちの指揮領域はうまい具合に保たれている。

集合住宅	飲食店	オフィスビル	公園・寺院
37,203	40,100	41,840	42,958
39,724	41,734	41,051	41,773
39,349	40,266	40,602	41,983
40,436	40,471	42,135	43,971

将来推計人口



荒木町においても大地と建築と人の関係性は破壊されつつある。

荒木町は都心へのアクセスの良さにも関わらず地価が低く、歴史ある街並みを保つものも次々と若い世代が新しく流れ込んでくる町である。

それに伴い、2000年前後に中規模マンションが開発されていったが、それらは小さな単位で造成されていた斜面地の街区を大きく平らにならし、あたかもそこが平地であるかのような建ち方をしている。

内部空間に関しても、各住戸が完全に閉じられ共用廊下にそっけなく並べられているようよくある計画で、周辺地域に対してはおろか、同じ建築に住む者同士でも関係性が発生しないような建築である。

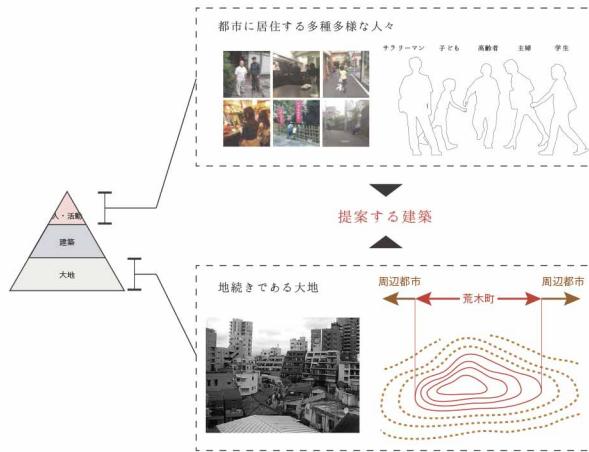
これでいいのか？荒木町



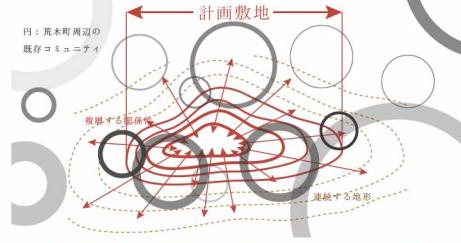
荒木町は今まで大きくその姿を変えてきた。誰かがそう決めたわけでもなく街全体が人々の手により徐々に変化していくのが自然な流れであり、誰も全体像を提示せず放っておくといずれこの町のはば全てがこのよのうなものに埋め尽くされるだろう。果たしてこれでいいのだろうか？

# 03 PROPOSAL | 提案

大地と建築と人の関係性から考える



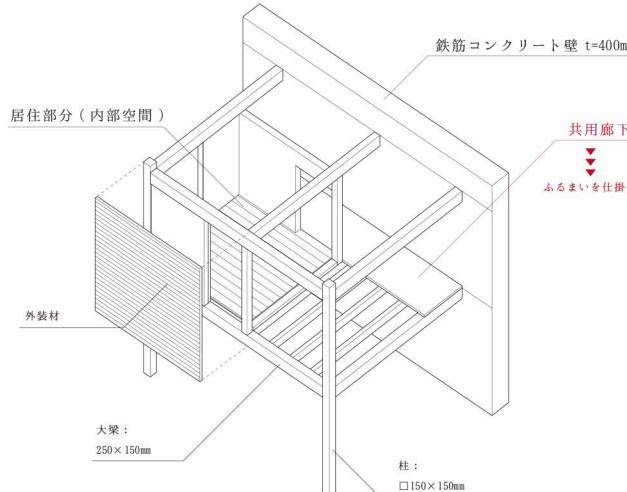
## 提案する建築



地形的で様々な共有空間がある集合住宅に、周辺の人々も巻き込んで小さくてゆるい関係性がたくさん複層されるような都市的な住まい、を提案できないか。  
これがこの場所における大地・建築・人の関係であると定義する。

# 04 STRUCTURE | 基本構造

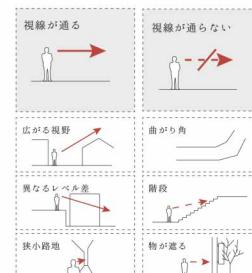
ふたつの基本構造



第三者の設計者が介入しても成立するような、何十年先も更新されるような全体の設計メソッドを定義する。

基本的な構造は鉄筋コンクリートの壁とそれに付随する木造の共用廊下・居住部分である。共用廊下は常に鉄筋コンクリートの壁に密接していることを大前提としてさらに詳しくそれぞれの構造に役割を付加させる。

## 共用廊下の概念を変える

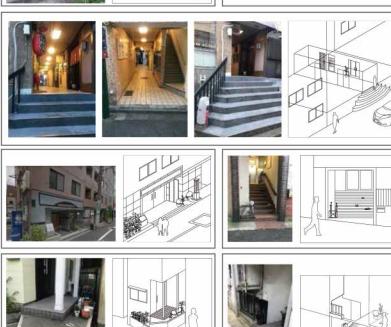


住んでいる人以外でも脚を踏み入れていいような、歩くことが楽しくなるような共用空間を設計する。  
荒木町を歩くと非常に様々なシーンに出会う。ビルに見下ろされた都市的な場所から急に植木鉢の並ぶ狭い路地に入ったり、急に視界が開けたり、さきまで歩いていたい場所が見えたり、曲がり角や階段がその先の道を隠しているり。  
様々な領域をまたぐことで「パブリックな街路」「プライベートな敷地」という単純な所有が喰えられる感覚がある。  
そのような環境を集合住宅の共有空間に組み込めば町を作るように建築を作り、様々な人の介入を許容できる環境を作り出せるのではないか。

# 05 DIAGRAM | ふるまいのタイポロジー

断面のたまり：レベル差を整合する際に発生する不確定領域に対するふるまい

## 建築の半外部／半室内空間



## 敷地内の外部空間



## 谷間の奥性：視界の不良性がもたらす不確定領域に対するふるまい

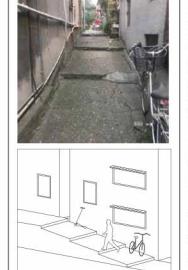
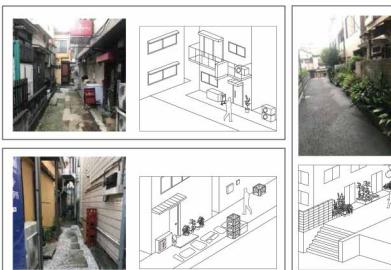
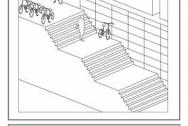
### 狭小路地



### 曲がり角



### 階段



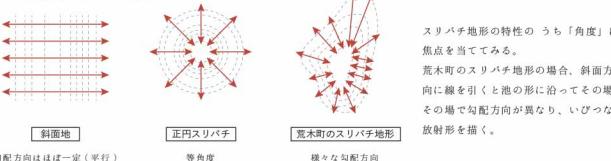
# 06 DESIGN | 基本構造

## コンクリート部分：大地のメタファー

町の構造を読みと先行形態の池だけだった頃の地形の角度が街区や道の角度として今もなお残り続けている。その角度を荒木町の町の構造として捉え、街区や道や擁壁の角度を拾い上げながら鉄筋コンクリート壁として立ち上げる。それは不動なる力強さを持ち、大地のメタファーとして意味付けする。水平に伸ばすことで方向性が発生し、周辺の道を歩く人を引き込ませたり既存の階段を下りる途中でふと敷地内部に進入させるような動線を計画する。



## 勾配方向の多様性

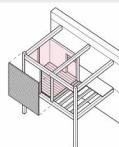


スリパチ地形の特性のうち「角度」に焦点を当ててみる。  
荒木町のスリパチ地形の場合、斜面方向に線を引くと池の辺に沿ってその場所で勾配方向が異なり、いびつな放射形を描く。

## 基層構造としての角度



## 木造部分：可変する動体



木造部分の機能空間は4つのスケールのユニットがあり、居住に限らず周辺のコンテクストに応じて飲食店やスタジオなどの職を展開したり、外部の人も利用できる貸し会議室があったりと、可変性のある動体としてRCの壁沿いに自由に展開する。

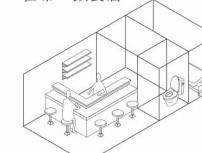
### S 単身者世帯



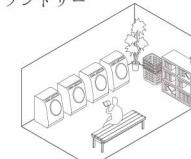
### M 2~3人世帯



### 1世帯+飲食店



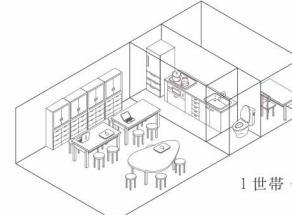
### ランドリー



### L 4~6人世帯

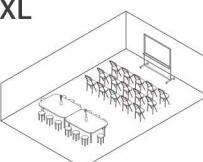


### or

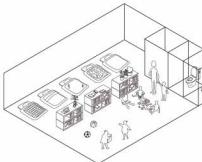


### 1世帯+作業スペース

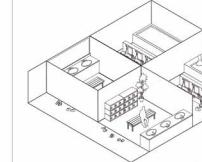
### XL



### 会議室

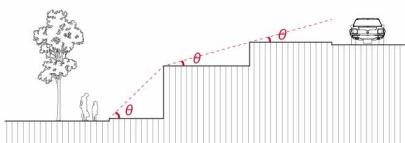


### 託児所



### 共同浴場

## スリパチの勾配に呼応するユニット



### A $25^\circ < \theta$ →S/M ユニット

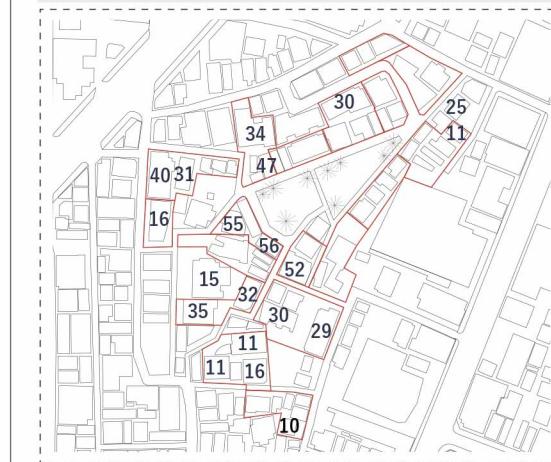
### B $18^\circ \leq \theta \leq 25^\circ$ →M/L ユニット

### C $\theta < 18^\circ$ →L/XL ユニット

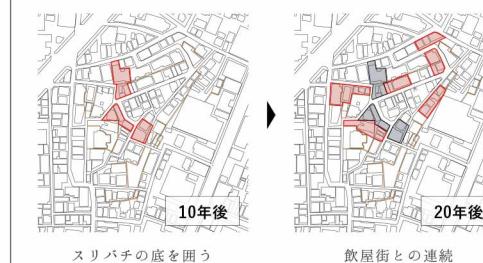
基本のユニットは4パターンで構成されておりそれぞれのスケールを持つ。機能は居住に限らず飲食店やオフィスとしても使用可能とし、周辺のコンテクストに応じて住まい手が職を展開する。ユニットの配置は地形に対応しており、急勾配のところは小さいユニットが、緩やかな勾配のところは大きいユニットが基本的に配置される。

# 07 PROCESS | 計画の過程

## 計画のプロセス



築年数を調べて同時に建てられたものをエリアでまとめて、老朽化による建て替えの時期に共同建て替えを提案し、そこにひとつの集合住宅を設計する。築60年を目処に建て替えていくとおおよそ50年で町が徐々に大地と同化していくように計画される。



10年後

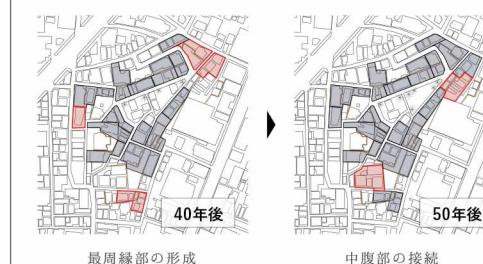
20年後

30年後

スリパチの底を囲う

飲居街との連続

オフィス街との連続



40年後

50年後

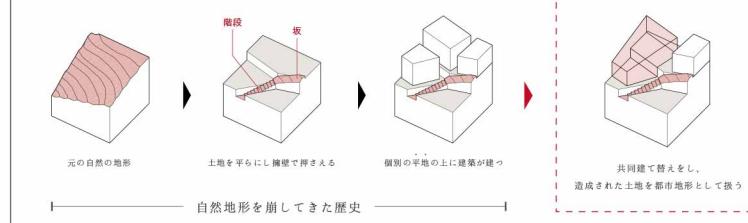
60年後

最周縁部の形成

中腹部の接続

to be continued...

## 自然地形から都市地形へ

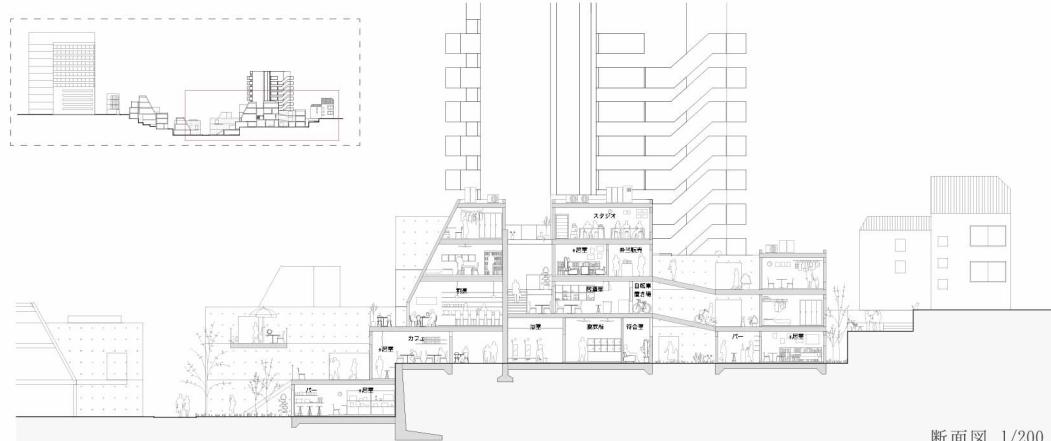


荒木町において元々の自然地形が残っている所は坂や階段といった街区以外の部分のみである。

自然地形は建築が建てられていく歴史の中で必然的に削減されていき、部分的な視点から見ると自然地形は失われたかのように感じられる。ひと区域の計画の際に横断的に高低差をまたいで計画する。

平たく造成された自然地形が失われた箇所でも、擁壁と平地をまとめて都市地形として扱うことができる。

## 08 SECTION | 断面図



断面図 1/200

## 09 SCENE | シーン



## 10 PLAN | 平面図



断面図 1/200

